敦賀半島ふるさと紀行

野坂神社の「だのせ祭り」
田植えなどの踊りで豊作願う

田打ちの踊り

小昼もち

福男の種まき

田植えの踊り

■県の無形民俗文化財

敦賀市野坂にある野坂神社の神事、「だのせ祭り」は旧暦正月に行われてきた伝統芸能です。県の無形民俗文化財に指定されています。

室町時代に始まったと伝えられ、「だのせ」は「田主」や「田之主」が語源とも言われます。かつては旧暦の1月8日に開かれていましたが、現在は旧暦1月8日の直前の日曜または休日に開かれます。平成28年は2月14日(日)を予定しています。

日本では稲作などの農耕が国や村を支えてきました。このため、人々は稲など五穀の豊作を氏神や田の神に祈ってきました。「だのせ祭り」もそうした祭りで、新しい年の豊作を祈願するものです。

■1年間の農作業を演じて

祭りの日、午前中には野坂神社で神事や、頭渡(とう)しと呼ばれる儀式などが行われます。このあと午後、だのせの踊りが神社の隣の野坂公会堂で行われます。

だのせの踊りでは、1年間の農作業をあらかじめ演じて見せることで豊作を祈願します。紺色の素襖(すおう)を着た6人の若衆が田んぼに見立てて床に置いた大太鼓を取り巻き、宮主が巻物を読み上げるのに合わせ太鼓の周りを回ります。かつては米作り以外の養蚕なども含んで長時間にわたったそうですが、現在では「田打ち踊り」と「田植え踊り」の二つが踊られています。

最初は「田打ち踊り」。若衆は鍬(くわ)に見立てた2本のチサの木の枝で太鼓をたたいて太鼓の周りを回り、「だのせのせのや」とはやしながら踊ります。踊りの合間に、裃(かみしも)姿で升を抱えた福男が現れると、若衆が「まこうや、まこうや。福の種をまあこいの」とはやします。福の種とは白米のことです。これに応えて福男は、「ふっくらたね(福の種)をまあこいの」と言って米をまく。そんな場面が挟まれます。

続いて「田植え踊り」が行われます。ここでは若衆が太鼓を背にして互いに肩を組み、稲の苗に見立てた杉の葉を両手に踊りますが、太鼓から横に離れ跳んで低くかがむ田植えの動作が加わります。この踊りの間には、土をならす柄振(えぶ)りを持った柄振りさしが現れ、田をならすしぐさをします。また、着物を着て妊婦と娘にふんした2人の男性(小昼(こびる)もち)が、小昼(昼飯)を頭上に載せて若衆の周りを回る場面も差し込まれます。

「田打ち踊り」「田植え踊り」とも3回ずつ踊られ、終わるたびに厄年などの果報者らを胴上げして場を盛り上げています。

■伝統維持へ子供達も参加

バチ替わりのチサの枝は、突いているとマムシにかまれないと伝えられ、持ち帰る人もいます。また、神事で備えたひし餅が来場者に配られています。

長く続く「だのせ祭り」ですが、今は伝統維持のため小学生も参加し、大人と交互に踊り手を務めています。野坂だのせ祭り保存会の川端一男会長は「地元の伝統を保存していくとともに、年中行事として地域住民の親睦を深める祭りとして大切にしていきたいですね」と話しています。

柄振りさし

発行所■日本原子力研究開発機構 敦賀事業本部＝〒914-8585 敦賀市木崎65号20番
☎0770(23)3021 ホームページhttp://www.jaea.go.jp（平成27年12月発行）